



## 巻頭言

立正大学教授（文学博士）三友健容

日本と韓国との佛教交流は周知のように非常に古い歴史をもっている。聖徳太子の師匠慧慈たちのように、インド発祥の佛教を日本の知識階級に広める役割を果たし、帰化人たちはそれをさらに民間へと浸透させていった。

近代では、アジア諸国が西欧の植民地として搾取されていくなかで、ロシア帝国に敢然として立ち向かい勝利をあげた日本帝国へのアジア人の期待は想像以上のものがあつたろうし、アジア諸国のなかでいち早く西欧近代化と近代学問へと脱皮していった日本への留学は当然盛んになっていった。そのなかで特筆すべき人物は金東華博士であろう。金博士は立正大学へ留学され、当時の政治情勢では考えられないことであろうが、立正大学の教壇に立たれて学生たちを教えられた。その後、母国の佛教学発展のために帰国され、東国大学で後進の育成に勤められ、その近代佛教学の薫陶を受け、世に名をなした佛教学者や僧侶は数知れない。

李朝朝鮮時代には儒教が重視され、佛教僧は京城のなかに入出入りすることが許されなかった。そのとき日蓮宗の僧侶佐野前励は、日本僧が出入りできるのに、人々の安穩のために日夜修行している自国の朝鮮僧を差別するとはどういうことかと大運動を起こし、遂に朝鮮僧の自由出入りを勝ち取った事件があつた。金博士が日本の佛教系大学のうちからとくに立正大学を選択されたのは、青年僧金博士がそのような立正安国の思想に共鳴したことは想像に難くない。金博士は日本留学の蛰雪時代の初心を忘れないようにと、苦学時代に愛用していたリング箱の机を大事にもって帰り、終生それを使用されていたと聞く。

佛教はいうまでもなく、恩讐を越えて一切衆生を救済する菩薩行の思想に基づく深淵な慈悲の教えである。しかし、もっとも信頼と友情を保ち続けなければならない日本と隣国朝鮮半島との不幸な歴史は、佛教者の立場からも返す返すも残念であるし、戦

後 60 年を経てもなおその不幸な出来事が尾を引いている恨みと悔やみは筆舌に尽くしがたい悲しみである。

昭和 20 年の大東亜戦争終戦の年に生まれた拙僧は朝鮮半島の植民地支配者ではないし、そのようなことも情報として知るのみであって、直接の当事者ではない。本年還暦の 60 年を迎え、佛縁ある韓国から拙僧のもとにきた多くの真摯な留学生も戦後生まれであって、過去の恩讐を切り捨てて新しい世代として世界平和に寄与しなければならない立場にある。ところが、最近の韓国に国粹主義が盛んとなり、戦前日本に留学した先師たちが、日本に留学したという理由で糾弾の矢面に立たされているのを知って、非常にやりきれない気持ちで一杯である。母国を忘れる忘恩の民がどこにあらうか。戦前の朝鮮留学生たちはみなその成果を母国発展のために貢献してきたのに、死してのちに断罪されるのを見て、胸が張り裂ける思いである。毀誉褒貶はその時代の価値判断や政治判断であって、真の価値を左右するものではない。ほんの一時だけのものである。留学生たちが世情に流されることなく、「昼夜常精進」されて初志を貫徹し、一切衆生の幸せのために母国で活躍されることを願ってやまない。

今回、韓国からの留学生たちの佛教研究論叢に拙文を寄せることが出来たことは無上なる光栄である。佛教学は緻密な文献研究による、佛陀の教えについての正確な理解のためである。この学的成果と知識をもって一切衆生を苦海から救済することこそが、我々菩薩の本願であって、佛教学を自分の榮譽栄達的手段や目的としては絶対いけないのである。人格の陶冶と利他行を忘れた佛教学はもはや佛教ではないのである。

清貧のなかで日夜刻苦勉強している真摯な若き佛教留学生に积尊のご加護と光栄あれ！

## 企画の辞

内外諸学者の永年の蓄積は、仏教の全てとはいえないまでも、かなりの程度まで明らかにすることを可能にした。仏教に対する学問的諸省察の中で、私が一つのアプローチをする機会を与えられ、韓国留学生印度学仏教学研究会の副会長の任に就いた。ここに論文集の第十号を刊行する運びとなった次第である。

今回の発行で第十号を向かう本論文集は、仏教学・印度哲学・仏教史学・密教学・仏教美術史など、諸分野にわたる研究業績を学際的に編集・発行することを目的としている。本会は日本東京滞在の仏教学専攻の韓国留学生らが主軸となって日韓仏教および仏教文化交流に注力してきた結果、とりわけ 2000 年 7 月刊行の第 8 号「＜特集＞日本における韓国仏教研究動向（蔵経閣出版）」は韓国語版に出版され、韓国文教部選定「今年度の優秀図書」に選ばれる光栄にあずかった。

本書の執筆方針として最初、特集テーマを選定し、決められた範囲内での幾つかのカテゴリでの投稿依頼を模索していたが、それは叶わず、諸執筆者の仏教学全般に関わった多様な論文を掲載させていただくこととした。執筆者にお会いするたびに、あるいはメール等でお話ししながらも、いろいろと学業と雑務に追われ、校訂の筆はなかなか進まなかった。

日韓の仏教研究者の協力によって成った本書は一に先輩知友の暖き御援助の賜であるが、とくに校正にあたっては、大正大学の平林二郎氏、大正大学卒業生の北国知男氏を初め、多くの方々の御助力を忝けなくした。最後に本書の出版全般にわたって御世話頂き、読者と共に研究し斧正を仰ぐことを可能とされた韓国図書出版蔵経閣の圓澤師以下担当者方々に篤く御礼を申し上げたい。

2005 年 11 月

朴俊爽